

# ノモンハン事件は旧日本軍初の細菌戦

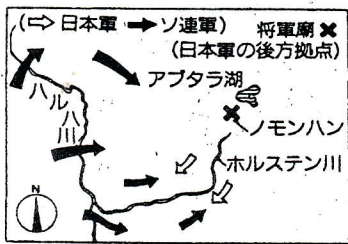
「ノモンハン事件の戦場の川に、私たちの手で大量の腸チフス菌を流しました」。昭和十四年に旧満州とモンゴルの国境で日満軍とソ連軍が戦ったノモンハン事件から五十年。関東軍直属の



細菌戦部隊だった石井部隊(別称七三部隊)が、当時、病原菌をばらまいた事実を、このほど三人の関係者が証言した。ノモンハン事件は、日本軍の細菌戦の初舞台だった。(石川 藤記者)

## 「水源の川へチフス菌流す」

### 石井部隊の関係者3人が証言



だ。部隊長の石井四郎軍医大佐(後に中将)も、しばしば前線へ姿を現した。細菌戦の研究部門からは、昆

## 感染狙い 石油缶20数個分

ノモンハン事件では、水不足の砂漠の戦場で、満州・ハルビン市外に本拠があった石井部隊の給水班が活躍した。表向きは防疫・給水部隊だったから



千葉 和雄さん



石橋 直方さん

ノモンハン事件では、水不足の砂漠の戦場で、満州・ハルビン市外に本拠があった石井部隊の給水班が活躍した。表向きは防疫・給水部隊だったから

始め、日満軍の敗北が決定的になった八月下旬。関東軍から石井部隊に参謀として配属されていた山本吉郎中佐(当時)が指揮をとった。

このときもトラックのライトを消して、ホルスメン川上流の投入地点近くまで行った。車で一、二時間の場所だった。横へ行った腸チフス菌入りの石油缶は二十、三個。山本中佐以下、十四、五人だった。

「消えた細菌戦部隊」の著書がある堂石敏一・神奈川大教授が「ノモンハン事件で石井部隊は細菌戦をやったことは、昭和十四年にハロフスで行われたソ連の軍事裁判でも記録されているが、もっと効力の強いコリチア菌やペスト菌を使った。中国側より日本軍の方が感染者が多かった。太平洋戦争でも末期に実施しかけたが、未遂に終わっている。

のほ三回目だった。一回目の帰り道に、戦場から敗走して行く途中の二十三師団長・小松原中將の一行と出会い、トラックに収容された。この話、ノモンハン事件で石井部隊は細菌戦をやったことは、昭和十四年にハロフスで行われたソ連の軍事裁判でも記録されているが、もっと効力の強いコリチア菌やペスト菌を使った。中国側より日本軍の方が感染者が多かった。太平洋戦争でも末期に実施しかけたが、未遂に終わっている。

### 軍事裁判にも記録

本気で細菌戦をやったというよりは、訓練を兼ねた宣伝だったような感じもある。ノモンハン事件が日本軍が細菌戦をばらまいた最初の戦争だったことは間違いない。翌年から石井部隊は中国戦線で細菌戦をやっているが、もっと効力の強いコリチア菌やペスト菌を使った。中国側より日本軍の方が感染者が多かった。太平洋戦争でも末期に実施しかけたが、未遂に終わっている。

## 効果はなかった? 訓練兼ねた宣伝か

中佐の計画だった。前線に来た山本中佐とトラックに乗って、投入地点を調査し、ち上げる信号機を仰ぎながら、ふたをあけて、腸チフス菌を培養したカンテンを川水にぶちまけた。ゼリー状の感じのものだったという。証拠を残さぬよう線へ運ばれた。

前線にいた昆虫班の班員を集めて特殊作業班が編成され、深夜、二台のトラックに分乗して三回にわたって投入地点へ出かけた。一、二回目はソ連軍の砲撃が激しかったり、トラックが

この投入作業に加わった鶴田さんの証言もほぼ同じだ。彼の手にきけて湿地を渡り、川岸まで行った。対岸でソ連軍が打ち上げる信号機を仰ぎながら、ふたをあけて、腸チフス菌を培養したカンテンを川水にぶちまけた。ゼリー状の感じのものだったという。証拠を残さぬよう線へ運ばれた。

石橋さんは、当時、ハルビン市の石井部隊について、生体実験した」と話している。

ノモンハン事件が始まって以来、石井部隊は腸チフス菌の生産におおわられた。培養基のカンテンや、培養缶を運ぶ仕事を手伝わされた。後になつて千葉さんは、一あのときの腸チフス菌投入作戦は成功したのかとある人に質問した。「なんの効果もなかったよ。ソ連軍の将兵は生水は飲まないから」という返事に拍子抜けしたという。

# 細菌戦の石井部隊

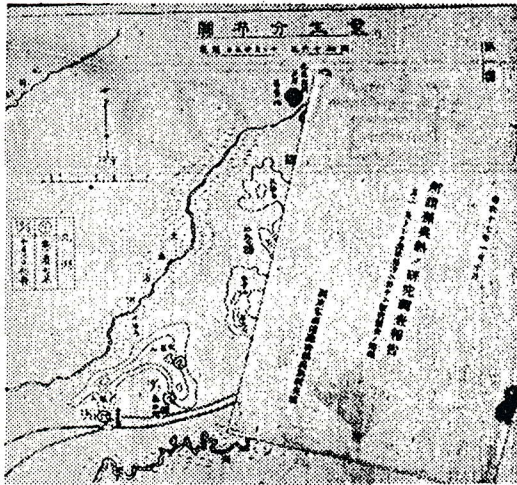
## 規模は3500人以上

### 厚生省資料もとに確認

旧関東軍第七三部隊（通称石井部隊、部隊長・石井四郎中将）による生体実験が問題になっているが六日、国会でも取り上げられた。厚生省は内部資料をもとに、これまで二千五百人前後といわれてきた石井部隊が、計三千五百人以上の大部隊だったことなどを公式に確認した。しかし、調査を求められた政府側は消極的な姿勢に終始した。米CBS放送は、石井部隊の残虐行為の特集番組を放送するなど海外でも関心が高まっているが「日本版アウシュビッツ」とまでいわれるこの問題は、歴史のヤミに葬り去られようとしている。

## 調査要求には消極姿勢

共産党の神利夫氏は同日午後の衆院内閣委員会で、細菌戦の研究のため多数の捕虜を「マルタ」として生体実験したとされる石井部隊の調査を求めた。



第一課長は、石井部隊の「留守名簿」（昭和二十年二月一日）「部隊略歴」をもとに答弁した。恩給を受けられる公務員は将校百三十三人、准士官・下士官・兵千五百五十二人、文官二百六十五人の計千五百五十二人。このほか嘔吐十三人と痲痺八人（重傷）千九百九十六人を含めると三千五百五十九人にも上る大部隊だった。

また、部隊略歴（二十年六月十五日現在）によると、本部はハルビンにおかれ、支隊は大連、ハイラルなど五方面。柳氏によれば従来、隊員は二千三百―二千六百人と推定されており、予想を上回る規模という。

柳氏は、石井部隊はベスト、コ「七三一部隊」が行った生体実験などによる調査結果をまとめた関東軍マル秘報告書

「これに対し、森山翼務第一課長は生体実験などの事実関係は承知していない」と「調査は困難ではないか」と思う」と答弁。また、田

ハルビンの本部のほか、ハイラル

「レラ、天然痘などの細菌を生体実験し、犠牲者は中国、朝鮮、米

「小説や論文の内容をもとに、いちいち対米照会する立場にない」と調査を拒否した。

「調査をするよう求めた。」

「調査を拒否した。」

総務府総務長官は「人道よ、まことに遺憾だ。非難の結果をたらしめ、再び繰り返してはならない」と述べた。一方、柳氏は戦後、石井部隊の隊員を戦犯にしない密約で、研究成果を米軍に提供したのはGHQ文書で明らかであるとし「米軍から関係書類を取り寄せ、調査を」と追った。これに対し、加藤良三・外務省北米局安全保障課長は「外務省北米局安全保障課長は「小説や論文の内容をもとに、いちいち対米照会する立場にない」と調査を拒否した。」

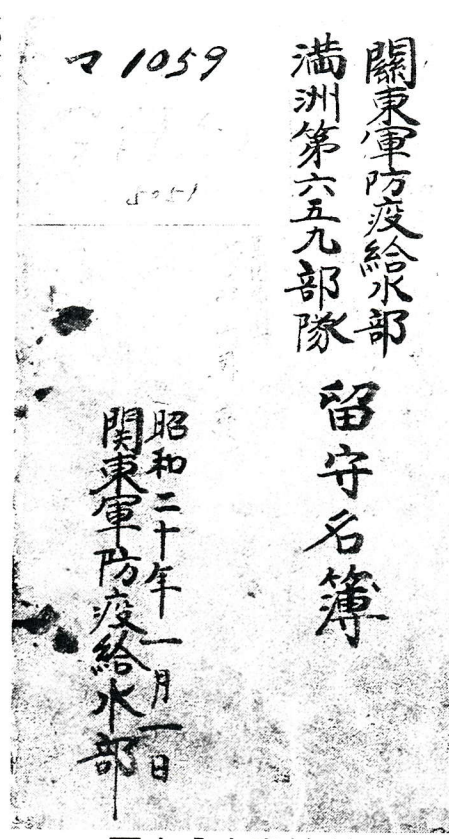
それによると同部隊の主任務は「細菌の研究、各部隊の防疫給水、血清、痘症の研究」。終戦の八月十五日以降は本部所属の軍人とその家族は日本に帰った。しかし、ハイラル、牡丹江の各支隊では武装解除され、大半がシベリアへ送られた。また、大連のベスト防疫部隊は奉天で武装解除されたあと、加脱を利用して病院を開設したが、医師、薬剤師は翌二十一年八月國府軍に施設を接収されたあと大部分が捕虜している。

# 731部隊員ら実名開示

## 3607人分、公文書館が名簿

戦時中に中国で人体実験を繰り返したとされる旧日本軍の「七三一部隊」の隊員ら三千六百七人の実名が記された名簿が国立公文書館から開示されたと、滋賀医科大学の西山勝夫名誉教授が十五日までに記者会見して明らかにした。

西山氏は「隊員ほぼ全員の実名が明らかになるのは初めて。研究に役立ててもらうため、今後ホームページで公開する」としている。開示されたのは、七三一



国立公文書館が開示した名簿

關東軍防疫給水部  
留守名簿  
満洲第六五九部隊

昭和二十年一月一日  
關東軍防疫給水部

部隊を中心とする「関東軍防疫給水部」の「留守名簿」。一九四五年一月一日付で作成され、軍医五十二人、技師四十九人、看護婦三十八人、衛生兵千百十七人などの実名や階級、連絡先が記

載されているという。二〇一五年から開示請求し、当初はほぼ黒塗りだったが、交渉の末に今年一月、連絡先の一部などを除いた名簿のほぼ全容が開示された。西山氏らのグループは、

部隊の軍医将校の学位論文について「人体実験を基にした可能性がある」として、京都大に学位授与の妥当性を検証するよう求める署名活動をしており、近く大学に申し入れる。